

# 新しい住民がふるさとの風景をどんどん食いつぶしていく現況の中、ふるさとの風景を守り、新しい住民もふるさとの風景を愛し、しかも、ふるさとの風景に花をそえる、そんな住宅群の提案

1170177 若林 寛和

指導教員 渡辺 菊真

高知工科大学 システム工学群 建築・都市デザイン専攻

## 1 背景

### 1-1 私とふるさとの風景

岡山県倉敷市福田町は私のふるさとだ。田園地帯の中を通る道に住宅が点在する風景が広がっている。航空写真で見ると菱形をした区画がどこまでも連続している。この菱形区画の福田町は、連続する道が果てなく延びていくように感じさせる。この道を歩くと住宅の間からその向こうに広がる田んぼが見える。朝方は霧が立ち上り、夕日が広い田んぼを染めていくのは印象的だ。視線を下に向けると道の横を流れる用水路に空や住宅が映り、私の歩きに合わせて流れていくかのように変化していく。用水路を泳ぐメダカやタナゴが私の影に驚き散っていく。道を辿りどこまでも歩きたくなる、私の好きな風景がそこにはある。

日々見え方の変わる風景はいつも新鮮で、ふと季節の変化に気づく瞬間が私は好きだ。同じような風景の区画や直交しない道は、自身がどこにいるか見失うことがある。思いがけずいつも通らない道へ行くと、気づかなかった田んぼの変化を発見することもある。昔から在り続けてきた風景は私が成長し大人になっても変わらず福田町に在り続けることに安心感を覚えた。

しかし、少しずつ迫っていた住宅地化が今まさに本格的に始まり、在り続けた風景が失われている。

### 1-2 ふるさとの風景の成り立ち

福田町は江戸時代に農業を目的として作られた干拓地であり起伏のない土地がどこまでも続いている。北西から南東に向けて道と共に用水路が引かれ、そ

こに寄り添うように住宅が点在する。この道は当時の主要な道（以下旧道）であった。その名残は旧道に沿って古い住宅が多く、用水路に洗い場があることに見受けられる。旧道の隣に平行に走る道は、もともとあぜ道であり用水路が付随していない。

旧道沿いの住宅は、住宅の表と裏を田畑や旧道に向けるのではなく、表と裏を旧道と平行に向けており、その庭は直接田畑と繋がっている（図1）。



写真1 旧道の風景 写真2 旧道沿いの風景

### 1-3 残したいふるさとの風景

福田町の風景を構成する要素は、広い田畑、どこまでも延びる道、用水路、人々が生活する住宅である。私の好きなふるさとの風景としてこれらを欠くことなく守り残したい。

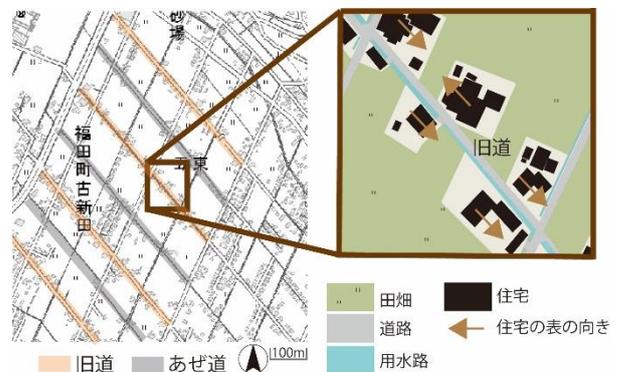


図1 風景の構成要素

## 1-4 現在の風景

時代の流れと共に進む農地の住宅地化は、福田町も例外ではなく、田畑は徐々に塗り替えられている。

生活の基盤が田畑や用水路に依らなくなった現代では、道沿いだけでなく区画を貫くような住宅地化が始まり徐々に田畑は細分化されている。

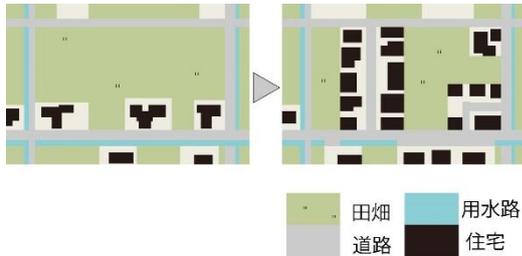


図2 田畑の細分化

細分化の際には新しく自動車のための道路が作られる。そこに建つ住宅は新しい道路に住宅の表を向け田畑に住宅の裏を向ける。田畑に意識を向けない住宅地化はふるさとの風景を壊し福田町とは無関係な風景を作り上げている。住宅が作り上げる空間は移り住む新しい住民にも影響を与え、その生活もまた福田町とは無関係なものとするのだろう。かつてのあぜ道は道路の拡張が行われ、今後、さらに住宅地化が加速すると考えられる。



写真3 あぜ道の道路拡張 写真4 現住宅地化

福田町とは無関係な住宅が増えていくことを認めることはできない。しかし、現代において農地の減少と住宅地化の進行を防ぐことは難しく、加速しているのが現状である。このままの状態ではいずれふるさとの風景が全て失われてしまう。ふるさとの風景を失わないためには新しい住宅地化の在り方とそのことにより新しい住民の意識を変えることが必要である。

## 2 目的

ふるさとの風景に起きている問題は、新しい住民が風景とは無関係な住宅地化で風景を食いつぶして

いることにある。そこで本設計では、無関係となる原因を解消し、ふるさとの風景を守り、新しい住民もふるさとの風景を愛し、ふるさとの風景に花を添えるような住宅群の提案を目的とする。

## 3 設計

### 3-1 指針

元からの住民にとってふるさとの風景を壊す新しい住民は受け入れられない存在である。しかし、受け入れざるを得ない状況である以上新しい住民には次の条件を守る義務がある。

- 一、ふるさとの風景を極力壊さないこと。
- 二、ふるさとの風景を愛すること。
- 三、ふるさとの風景の美化に寄与する暮らしをすること。

これらの条件から、次の3点を指針として定める。

- 一、風景を守るため、風景を極力壊さない住宅群。
- 二、ふるさとの風景の魅力を引き立て、新しい住民が魅力を感じ、元からの住民にとっても魅力の再認識に繋がる住宅・住宅群。
- 三、新しい住民がふるさとの風景に意識を向け、生活の中で風景の美化に寄与できる住宅・住宅群。

### 3-2 設計の方法

以下の手順で設計を行う。

- I 対象敷地の選定
- II 住宅の型の決定
- III 住宅の軒数・規模の設定
- IV 風景計画
- V 住宅計画

### 3-3 設計の内容

#### I 対象敷地の選定

住宅地化は今後、福田町全域に及ぶと想定し、設計を行った。風景を極力壊させないため、住宅が接する道として新たに道は設けない。そこで既存の区画周囲の道から計画地前面道路を一つ定めた。旧道は福田町の風景を色濃く残すため手を加えない。一方、反対側のかつてのあぜ道は、旧道を含むほかの

三面に対し用水路が無く風景の構成要素が少ない。道路の拡張により今後最も住宅地化の可能性も高い。そのため、あぜ道を対象と定めた。

## II 住宅の型の決定

風景を極力壊させないため、現在の住宅地計画に見られる不要部分を極力減らす。具体的には隣り合う住宅間の隙間と、各家へアプローチする道路をなくす。この条件を満たすことのできる住宅の型として、隣同士の壁と壁の隙間を無くし全ての住宅が一つの道路に接して内部の道路を必要としない町家型の住宅を基本型とする。

## III 住宅の軒数・規模の決定

既に住宅地化が進んでいる区画に建つ住宅から推測し、区画あたり軒数 40 軒程度、住宅一軒の延床は 120 m<sup>2</sup>~150 m<sup>2</sup>とした。区画一边の長さは 120m ほどであるため、町家型住宅の 1 軒辺りの間口は 3m とした。風景を極力壊させないため設計住宅はあぜ道の道路端より区画一边の 1/3 程度である 40m 以内に収まるように設計した。

## IV 風景計画

あぜ道沿いを住宅地化する際、過ごしやすい快適な空間としてしまうと、新しい住民はあぜ道に意識を向けた生活を始め、あぜ道だけで完結し現在と変わらないものになってしまう。そこで、あえてあぜ道を意識の向かない空間とし旧道の風景へと意識を向かわせる。過ごしやすい旧道と過ごし難いあぜ道の二つの存在は対比を生む。福田町において旧道は生活基盤として整えられた空間（以後生活空間）であった。そこで、あぜ道は無機質な自動車道とし、旧道と対比させる。全住宅の前に駐車場を設け、合理的な機能だけの空間（以後機能空間）とした。機能に絞ったあぜ道は、自動車が整然と並ぶ場所となり、用がなければ居続けようと思わない道とした。あぜ道との対比によって引き立てられる風情ある旧道は、元からの住民と新しい住民の双方にとって魅力を感じることができるものとなる。

新しい住民にとって、旧道側に意識を向けることは福田町と関係を持つことに繋がる。そこで、設計

住宅では、住宅の表を旧道側に向け、さらに庭を設けることで移り住む住民の意識を旧道側に向かわせた。このことにより、新しい住民と住宅が福田町と関係を持つことができる。また、庭があることは、旧道側から住宅を見たときに田畑と住宅を繋ぐ緩衝材となると共に、新しい住民がふるさとの風景に意識を向け、田畑側に積極的に花木を植えるなど風景をより美しくしていく場所となる。

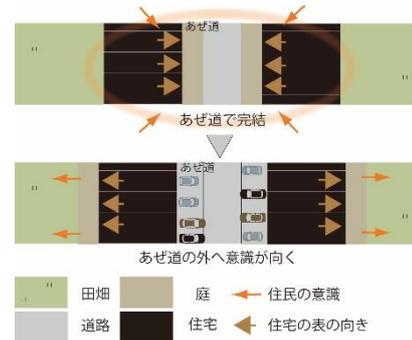


図4 風景計画

## V 住宅計画

新しい住民に、ふるさとの風景を愛し生活の中で風景の美化に寄与させるような住宅計画が必要となる。

### 1) 空間分節

風景計画では旧道とあぜ道を生活空間と機能空間で対比した。そこで、住宅内も同様に生活空間と機能空間に分節することで対比し、新しい住民の意識が旧道側に向かうようにした。

住宅内では、生活空間として家族全員が過ごす場所「リビング、ダイニング、キッチン」を当てる。機能空間として生活の上でなくてはならない機能「トイレ、洗面、浴室」を当てる。

住宅内の空間の振り分けは、生活空間を旧道側に機能空間をあぜ道側に置く。各個人の居室は領空感の間に配置した。

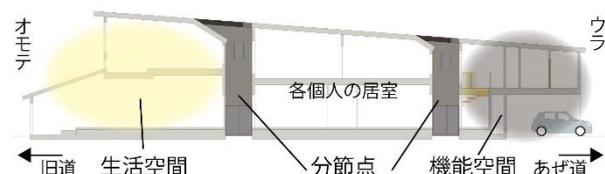


図5 生活空間と機能空間

## 2) 生活空間・機能空間

生活空間は新しい住民の意識を自然に旧道側に向けさせるため、吹き抜けと開口部で最も広がりを感じる空間とした。旧道側の屋根を一部下げ、高まった旧道側への空間の広がりや田畑の広がりへ向かうようにした。

機能空間は駐車場の上に設けることで面積の縮減を可能とした。生活空間へ意識を向けさせるため、天井の勾配や開口により、旧道側へ意識が向かうようにした。



図6 生活空間・機能空間の意識の向き

## 3) 玄関・庭

本設計では住宅の表を旧道側とし、住宅の裏をあぜ道側に向けている。しかし、住宅へあぜ道側からのアクセスも必要である。そこで、両側に玄関を設け、旧道側はあぜ道側より玄関を大きくして対比を生むようにした。住宅の裏であるあぜ道側には新しい住人の意識が向かない。そこで生活の意識が向く旧道側の庭に地域コミュニティの場となるよう共有スペースを設け、住宅間の移動も可能とした。また、庭は、草花や花咲く樹を植えて、旧道側からの風景を彩り美化する。

## 4 情景

### 4-1 守られたふるさとの風景

あぜ道の住宅地化によって、田畑が細分化することではなく、どこまでも延びる旧道沿いに田畑の広がりを感じることができる。住宅地化されたあぜ道は住宅の裏と駐車場がひたすら続く風景となった。整然と駐車場が並ぶ変化のないあぜ道はつまらなく人通りがない。それよりも用水路をメダカが泳ぎ、田畑が季節によって変化する風景がある旧道の方を住民は好み通る。散歩している人を旧道でよく見かける。旧道から見る新しい住宅群では住民が風景を意識してきれいな草木を植えるなど庭を整えつつコミ

ュニティを作っており、風景を積極的に彩る姿勢が見える。

### 4-2 風景を愛する住宅群

駐車場の奥から住宅に入ると住宅の奥にキッチンとダイニングのある生活空間が見える。土間を通り抜け二つの坪庭を横切ると少しずつ高くなっていた天井は生活空間の吹き抜けで最も高くなる。上下階の大きな開口から見える田畑の風景に自然と視線が向き田畑の風景の広がりを感じる空間だ。庭からの来客にも対応できるよう整えられた玄関を抜けて外に出ると、目の前に田畑が広がる庭に出る。風景を意識し管理をされた庭はそれぞれの住宅ごとに綺麗に整えている。庭を地域コミュニティの場として新しい住民はよく集まっている。生活の中心が田畑に近く、日々風景の中で過ごしている感覚は福田町で暮らしていることを深く実感する。

## 5 まとめ

町家型を基に設計した住宅をあぜ道側に集中させることによって、住宅地化によって風景が全て失われることを防ぐことができた。旧道とあぜ道の対比からふるさとの風景の魅力を引き立て、住宅の表を旧道側に向けることで新しい住民は風景の魅力を再認識し、新しい住民は福田町と関係を持つことができた。

以上のことより、ふるさとの風景を極力壊さない住宅群とすることで、ふるさとの風景を守り、新しい住民もふるさとの風景を愛し、しかも、ふるさとの風景に花をそえる、そんな、暮らしをすることができる住宅群の提案ができたのではないだろうか。

## 6 参考文献

福田町誌

国土地理院地図

<http://maps.gsi.go.jp/#16/34.543443/133.765111/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j0l0u0f0> (2017.1.30 取得)